

# 価値形態論の現在

--主に1980年代以降の研究を対象として--

田中 史郎

## もくじ

- 一 マルクスの価値形態論の形成
- 二 宇野弘蔵の価値形態論
- 三 諸問題の検討

本稿は、主に近年の価値形態論研究を紹介し、検討することを目的とする。戦後、宇野弘蔵の根本的な提起により開始された価値形態論を巡る諸論争は、近年は収束をみたようにも感じられる。それは、一頃の華々しい論争という形態が影をひそめたからに他ならないが、とはいえ、近年においてはより詳細な種々の研究が発表されている。

すでに、『資本論』の解説や諸研究のサーベイに関しては、宇野弘蔵『資本論研究』全五巻（筑摩書房、一九六七-六八年）、大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』（東京大学出版会、一九七六年）、佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶ』全五巻（有斐閣、一九七七年）、降旗節雄編『宇野理論の現段階、1--経済学原理論』（社会評論社、一九七九年）などの優れた著作があるので、本稿では検討する諸研究の対象を基本的には一九八〇年代以降にしたいと考える。とはいえ、近年の研究を理解するためにもマルクスと宇野弘蔵の価値形態論を一瞥しておくことは肝要なことである。本稿でも、これらの理論をふまえ、その後近年の諸研究の検討を行いたい。

なお、本文中の引用は全て末尾に示されている文献からのもので、省略形でページ数を掲げてある。

## 一 マルクスの価値形態論の形成

価値形態論を理解するためにはその形成史を確認しておくことが有意義であろう。周知のように、マルクスの価値形態論は形式的には『資本論・初版』「本文の価値形態論」、同「付録の価値形態論」、および『資本論・現行版』の「価値形態論」の三種類があるが、価値形態論の直接の萌芽は『経済学批判』「第一章商品」と「第二章貨幣または単純流通」（の一部）に求められる。ここではこれまであまり試みられなかった価値形態論を含む商品論の体系構成の形成史の視点から検討したい。

『経済学批判』（以下、『批判』とする）から順に見てみよう。『批判』は「第一章商品」「第二章貨幣または単純流通」となっており、節などの細かい項目分けはないが、内容的には後の『資本論』（初版、現行版）の商品論、貨幣論に相当する部分が未分化の形で示

されている。だが、貨幣の導出の論理という観点から『批判』と『資本論』との対応関係を見ると、やや複雑になっている。

『批判』では、表現はかなり異なるとはいえ、『資本論』（初版、現行版）に至って商品の二要因論、労働の二重性論等に発展する部分の記述の後、「一商品の交換価値は、その商品自身の使用価値には現れない。一商品の交換価値は、他の諸商品の使用価値で自己をあらわす。」（『批判』38頁）という文言から価値形態論に相当する論理（以下、「前者の価値形態論」と呼ぶ）が展開され、そして、「いままで商品は、一面的に考察された。諸商品相互の現実的関連は、それらの交換過程である。」（『批判』42頁）という「移行規定」をもって交換過程論に対応する部分に移っている。しかし、この交換過程論に対応する部分には、『資本論』（初版、現行版）の交換過程論とは異なり、いわゆる交換過程論と共に価値式が示され、また、この価値式は、次の「第二章貨幣または単純流通」「一、価値の尺度」に示されている価値式（『資本論』（初版、現行版）にはこの価値式は存在しない）に接続するものと考えられる。先の「前者の価値形態論」とは別のもう一つの価値形態論（以下、「後者の価値形態論」と呼ぶ）があることになる。『批判』にはいわば二つの価値形態論が存在しているのである。

しかし、その二つの価値形態論は性格がかなり異なっている。「前者の価値形態論」と「後者の価値形態論」とでは、どちらも第 形態に相当する部分まではかなり類似した論理を展開しているものの（もっとも、前者の価値形態では第 形態は価値式としては表されていない）その後の展開は大きく異なるのである。

前者の価値形態論では「どの商品も、他のすべての商品の交換価値の共通の尺度として役立つ排他的な商品であるとともに、他方では、他のそれぞれの商品が その交換価値を直接にあらわす場合の、その多くの商品のうちの一つにすぎない。」（『批判』39-40頁）という結論が導かれている。後に見るように、これは『資本論・初版』「本文の価値形態論」の「形態」に相当する内容である。

それに対して、後者の価値形態論では、「2ポンドのコーヒー = 1エレのリンネル / ポンドの茶 = 1エレのリンネル / 8ポンドのパン = 1エレのリンネル / 」(『批判』49頁。/は改行を示す。以下同様)という第 形態が示された後に(「価値の尺度」で)「1トンの鉄 = 2オンスの金 / 1クォーターの小麦 = 1オンスの金 / 1ツェントナーのモカコーヒー = オンスの金 / 」(『批判』75頁)という価値式が与えられ、ここで明確に貨幣が導出されている。

すなわち、『批判』では価値形態論がやや錯綜して展開されているが、貨幣を導出するという課題は交換過程論(の中の「後者の価値形態論」)で果たされているといえる。

こうした構成を『資本論』の方から位置づけてみよう。『資本論・初版』は、「第一章商品と貨幣、(一)商品、(二)諸商品の交換過程、(三)貨幣または商品流通」と目次に示されていることから推測できるように、内容的には、冒頭の商品論、価値形態論、物神性論があり、先に『批判』でみた交換過程への「移行規定」とまったく同様な規定(『初版』九四頁)を媒介にして交換過程論が導かれ、貨幣論へと続く構成になっている。このように見てみると、『初版』では、『批判』と同様に、貨幣の導出という課題は交換過程論に求められていることが容易に想像される。事実、「本文の価値形態論」では貨幣が導かれていないのである。

だが、『初版』には「付録の価値形態論」があり、「本文の価値形態論」との異同が問題にされてきた。周知のように、これらの二つの価値形態論は、第 形態まではほぼ同一であるものの、それ以降は大きく異なる展開を示していた。「本文の価値形態論」では「形態」(『初版』75頁)が示され、貨幣が導出されずに価値形態が終了しているのに対して、「付録の価値形態論」では「貨幣形態」で終結している。

すなわち、『批判』との対応関係からいうと、『初版』「本文の価値形態論」は『批判』の「前者の価値形態論」が、『初版』「付録の価値形態論」は『批判』の「後者の価値形態論」がそれぞれ発展したものと見えよう。『初版』に「付録の価値形態論」が付けられたことにはエンゲルスやクーゲルマンの助言があったことが知られているが、こうして見ると「付録の価値形態論」は一つの必然と見えよう。

ともあれ、『資本論・初版』においては、もしも「付録の価値形態論」が無かったとすれば、貨幣の導出は、貨幣を導かない価値形態論の後に交換過程論が置かれ、そこでなされるという構成になり、これは『批判』と同型であると共に、それなりに体系的な整合性があるといえる。しかし、現実には、貨幣を導く「付録の価値形態論」が存在し、これは『批判』に明確にその萌芽が存在したのもでもあり、貨幣の導出をどのように考えるべきかが大きな問題となる。さらに問題は、知られているように、『資本論・現行版』の価値形態論には「付録の価値形態論」が採用されている点である。

こうした点をふまえて、『資本論・現行版』の商品論の構成を検討しよう。『現行版』の目次構成は『初版』と較べると、その「(一)商品」の内容が詳細になったとはいえ、両者はかなり類似している。内容的にも、両者とも、価値形態論の次に物神性論があり、そして交換過程論に続いているのであって、しかもその交換過程論はまったく同一である。このように『現行版』は、一見すると『初版』と同様の構成であるにも係わらず、しかし、決定的な違いが二つの点で認められる。その第一は、『現行版』では価値形態論に『初版』の二つの価値形態論のうちの「付録」のそれが採用された点であり、第二は、『現行版』と『初版』の交換過程論がまったく同一にも係わらず、『現行版』では『初版』に見られた - ひいては『批判』に見られた - 交換過程論への「移行規定」が削除されている点である。こうした変更をどのように理解すべきかが問題であろう。

貨幣形態を導出しない価値形態論があり、物神性論に続いて「移行規定」を媒介に交換過程論をおき、そこで貨幣を導出するという構成になっている『初版』本文においては、それなりに論理の整合性が認められることは既述したが、しかし、『現行版』においては、「付録の価値形態論」を採用したが故に、そこですでに貨幣形態が導出されているのであって、交換過程論での貨幣の導出といわば二重になり、矛盾が生ずるわけである。マルクスがなにゆえ矛盾を生じさせるような「付録の価値形態論」を『現行版』に採用したのかは不明だが、こうして見ると、『初版』と『現行版』とでは交換過程論の体系的な位置づけが変更されたと考えざるを得ない。『現行版』においては、貨幣を導出するという課題が、交換過程論ではなく、価値形態論に求められ来ているということができよう。『初版』と『現行版』との交換過程論が同一にも係わらずである。交換過程論への「移行規定」が削除されているという事実がこれを示しているのではないかと思われるのである。

以上の理解は、マルクスの意図としてそうであったか否かは別として、しかし、形成史的考察からの必然的な帰結なのである(価値形態論の形成に関しては、h 第一篇を参照の

こと)。

こうした方向で価値形態論を位置づけ、それを体系的に純化したものに宇野弘蔵の試みがある。宇野は貨幣の導出を価値形態論に求め、体系的な著作である『経済原論』でそれを完成させた。むろん、宇野の価値形態論はマルクスのそれとは異なる点多々あるが、しかし、マルクスの貨幣導出の試みの発展の延長線上にそれは位置づけられよう。従って、価値形態論の研究には宇野の問題提起が不可欠となるのである。

## 二 宇野弘蔵の価値形態論

宇野弘蔵『経済原論』の価値形態論を、必要に応じてマルクスのそれと対照しつつ検討しよう。

始めに結論めいたことをいえば、マルクスの価値形態論には二つの論理が混在している。その一つは、商品論の冒頭部分で労働による価値実体の論証がなされたものとし、それを前提として価値形態論を展開するという論理である。実体として確定された価値が如何に表現されるかを追求する論理や、価値実体を前提とすることで価値式両辺の逆転可能性を強調する論理がそれである。周知のように、これは「実体論的論理」と呼ばれるものである。これに対して、もう一つは、たとえ価値の実体が規定されていたとしても、ある商品の価値は他の商品の使用価値でしか表現することができず、この関係の発展を価値形態の展開とする論理である。この論理においては価値の実体規定は希薄化されるのであって、価値式両辺の両極性を強調する論理でもある。これは「形態論的論理」と呼ばれるものである。

いうまでもなく、宇野はこの後者の論理を明確にすると共にそれを継承し純化した。商品論の冒頭での価値の実体規定を排除したこと、貨幣導出の論理を、交換過程論にではなく、その内のある種の内容を織り込みつつ価値形態論に一本化して求めたことなどがそれである。宇野の「マルクスは交換過程論で初めて所有者が出るようなことをいっているけれど」、「相対的価値形態にある商品には所有者がいる方がよくわかる。」(『五十年』下、635頁)という発言はその方法を端的に表している。

以下、価値形態論で中心をなす価値式と、各形態への移行規定を軸に考察を進めよう。

### (1) 第 形態の第 形態への拡大

「20エレのリンネル = 1着の上着」(『資』(1)94頁)これが『資本論』の価値形態の第 形態である。これに対して、宇野の第 形態は「リンネル—〇ヤール = 五ポンドの茶」(旧『原論』31頁)として示されている。これはマルクスのそれと一見同様のようだが、相対的価値形態の商品名とその数量の記述がマルクスとは反対になっている点が見逃せない。商品名と数量の順序が相対的価値形態と等価形態とでは異なることで、価値式がマルクスのように「逆関係を含んでいる」(『資』(1)96頁)とはいえないことを明確に示すと共に、この価値式は、「相手の商品の方の使用価値の一定量が先ず決定され」(旧『原論』32頁)るのであって、「リンネルを商品として所有する者が、自分の欲する五ポンドの茶に対してならばリンネル—〇ヤールを交換してもよいという関係を表示する

もの」(旧『原論』33頁)と理解されている。商品所有者を想定することによって相対的価値形態と等価形態の意味が明確に表されている。この第 形態において宇野の価値形態論の方法が基本的に示されているといえよう。

第 形態の最後でマルクスは「個別的な価値形態は もっと完全な形態に移行する。」(『資』(1)118頁)と述べ、「20エレのリンネル=1着の上着 または=10ポンドの茶 または=40ポンドのコーヒー」(『資』(1)118頁)という第 形態を導出する。これは、実体的に規定されたある商品の価値が如何に十全に表現されるかを価値形態の発展とするものであって、実体論的論理の変形といえる。

しかし、宇野のように相対的価値形態の商品にその所有者を想定するという方法によれば、このようにはならない。「リンネルの価値はもちろん単に茶によって表現せられるだけではない。リンネルはリンネル所有者の欲するだけの商品によってその価値を相対的に表現せられる。」(旧『原論』34頁)となる。「リンネル一〇ヤール=五ポンドの茶 / リンネル二〇ヤール=一着の上着 / リンネル四〇ヤール=一トンの鉄 / 」(旧『原論』35頁)これが宇野の第 形態である。リンネル所有者の欲望により、右辺、等価物の商品名と数量が先決され、それに応じて左辺、相対的価値形態の数量も規定されるということが明確に示されたのである。

もっとも、この文言では、リンネル所有者の欲望がただ一つの商品に限られているときが第 形態であり、その欲望が多数の商品に拡大した場合に第 形態へ移行する(以下、「欲望拡大説」と呼ぶ)ようにも考えられるが、明確ではない。もしもそうだとすれば、第 形態では商品所有者の欲望がただ一つの商品に対してのみでなければならぬことになるが、そうしたことは一般的にはいえないのではないか。極端な想定をすれば、始めは他の商品に対する欲望が一つであり、その後それが多くの商品に拡大するということもできようが、商品所有者が始めから複数の商品に対して欲望を感じないとは限らない。そうすれば、第 形態は成立しなくなる。マルクスが第 形態を「全体的な 価値形態」というのに対して、宇野が「拡大されたる価値形態」と命名していることは示唆的ではあるが、欲望拡大説ではない展開の論理が求められていよう。第 形態の第 形態への展開の論理には再考の余地があると思われる。

## (2) 第 形態から第 形態への移行

マルクスは第 形態の最後に第 形態への移行の論理を示す。すなわち、第 形態は「未完成」であり「寄木細工」であり「無限の価値表現列」である故、「統一的な現象形態をもっていない」(『資』(1)122頁)という「欠陥」をあげ、この第 形態を逆転させる。第 形態で述べられた「逆関係」(『資』(1)96頁)の論理がここで登場するわけである。こうして、「1着の上着=20エレのリンネル / 10ポンドの茶=20エレのリンネル / 40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル / 」(『資』(1)123頁)という第 形態を導出する。そして、右辺を「一般的等価物」とする。これはいうまでもなく、貨幣形態に骨化する一步前の形態である。

これまでもっとも議論を読んだ箇所はこの部分である。というのも、このように第 形態を逆転することによって第 形態が導出されるならば、「リンネルに当てはまることは、

どの商品にも当てはまる。」(『初版』75頁)のであり、これらも逆転されてしかるべきである。そうであるならば、多数の「一般的等価物」が成立し、貨幣に骨化しないことになる。「一般的等価形態は、つねに、ただ一つの商品だけのものになる。しかし、それはどの商品のものにもなる。」(『初版』76頁)とならざるを得ない。実はこれが『資本論・初版』「本文の価値形態論」の「形態」の問題なのである。

すなわち、第 形態から第 形態への移行は逆転の論理でなされた(『現行版』、『初版』「本文」、同「付録」とも)が、この論理をもう一度、多数の第 形態に適用したのが「形態」の問題であった。『現行版』になって - 正確には『初版』「付録」においても - なぜこの論理が放棄されたのかは確定し得ないが、第 形態の導出に逆転の論理を用いる以上は、『初版』「本文」のような「形態」が導出される方が論理整合的であることは疑いない。

ともあれ、『資本論・現行版』の第 形態では一般的等価物が導出され完成されたもののように見えるが、しかし、それはいわば論理矛盾をおかすことによるのみ可能だったのである。従って、第 形態への移行に関しては逆転の論理ではない方法が求められている。

宇野は「あらゆる商品の拡大されたる価値形態において その等価形態におかれる商品の出現」(旧『原論』37頁)を媒介にして第 形態を導いている。これを「共通等価物説」と呼ぶことができる。「茶一五ポンド = リンネル三〇ヤール / 上衣二着 = リンネル四〇ヤール / 鉄三トン = リンネル一〇〇ヤール / 」(旧『原論』38頁)、これが宇野の第 形態である。

このように、宇野は共通等価物説によって第 形態への移行をなしているといえるが、価値式を見ると不十分な点も目に付く。それは何よりも、それまでは相対的価値形態にあったリンネルを等価物としている点であり、文中でも「逆転」(旧『原論』36頁)や「顛倒」(旧『原論』38頁)という用語が用いられている点である。しかし、注目すべきは、第一に、第 形態の等価形態の商品名とその数量の記述順序がそれまでとは異なっていること、また、第二に、相対的価値形態の商品の数量が(等価形態の商品の数量も)増大していることである。これらは、第 形態の等価物はそれまでの等価物とは性格が異なっていることを示すためのものといえよう。それまでの直接的な欲望の対象という意味に加えて交換の媒介物という意味が加わったものとして一般的等価物が把握されていると考えられる。だが、この点はやや明確さを欠いているので、より深められるべき課題である。

### (3) 第 形態の貨幣形態への骨化

マルクスは、貨幣形態は「第 形態と違うところはなにもない」(『資』(1)131頁)として、それを「20エレのリンネル = 2オンスの金 / 1着の上着 = 2オンスの金 / 10ポンドの茶 = 2オンスの金 / 」(『資』(1)131頁)と示す。そしてこれを「価格」表現という。だが、右辺がすべて「2オンスの金」になっており、これを(一〇〇円セール等の特別な場合を除いて)価格表示と呼べないことは明らかである。

これに対して宇野は、「鉄一トン = 金二オンス / 上衣一着 = 金一オンス / 小麦一クォーター = 金四分の三オンス / 」(旧『原論』41頁)という価値式を掲げた。両形態

の商品名と数量の記述の順序問題は既述した通りで、ここでも正確に示されているが、それに加えて、相対的価値形態の商品数量がすべて一単位になっているのは現実の価格表示からしても当然といえる。

ところで、この貨幣形態への移行規定に関しては次のように述べられている。すなわち、「抽象的に考えれば、あらゆる商品が一般的等価物となり得るものとしなければならない。しかしこの形態は、単にそういうように理論的に考え得るといだけのものではない。事実、おのずから特定の商品に限定されて来る。そしてこの一定の商品は、その使用価値がかかる特殊の地位に適合したものと、金銀に、そして結局は金に落ちつくのである。」(旧『原論』39-40頁)と。

見られるように、ここでは、抽象的、理論的には「あらゆる商品が一般的等価物となり得る」が、事実としてはそれはそれに適合した「金銀」そして「金」になると述べられている。貨幣形態への移行が、「抽象」「理論」と「事実」との二段構えの方法でなされているといえるのである。実は、こうした方法は新『原論』あるいはそれ以降に改められつつあると考えられるが、そうした点の検討は後述することとして、ここでは問題があることだけを確認しておきたい。

### 三 諸問題の検討

これまで宇野説を中心に検討し、三点ほどの問題点を指摘した。ここではそれらについて諸説を交えながら検討しよう。

#### (1) 第 形態の第 形態への拡大の問題点

マルクスの価値形態論の地平を根本的に乗り越えるものとして、価値形態論に商品所有者を想定するという宇野の方法があったことはすでに見たが、それ故に、第 形態の第 形態への展開は難問を含むものであった。すなわち、宇野にはこの移行に当たって、商品所有者の欲望が拡大したことを軸にそれを展開していると理解できるような面があった。しかし、そうであるならば、第 形態ではその欲望が一つの商品に対してだけであるということを経験的に証明せざるを得ず、しかし、それは極端な想定を除いては困難であった。

この問題に関しては、すでに複数の論者から解決策が提起されている。例えば、日高普は「(第 形態の - 引用者)綿布と茶の関係はその(第 形態の - 引用者)要素にすぎない」(i 20頁)いと述べ、奥山忠信も「簡単な価値形態を拡大された価値形態の構成要素の一つ」(n 333頁)とする考え方を支持している。その意味で、「簡単な価値形態から拡大された価値形態への移行問題は生じない」(n 334頁)と(これらを「要素の復元説」と呼ぶ)。また、田中史郎も「第 形態から第 形態への移行は、商品所有者の欲望の拡大ではなく、分析者の視野の拡大によるもの」(h 142頁)(「視野の拡大説」と呼ぶ)という。見られるように、この問題の解は、要素の復元説ないしは視野の拡大説に求められつつあるといえよう(oも参照のこと)。もっとも、小幡道昭は、そもそも第 形態の理解にも関係するが、第 形態をかなり異なったものとして捉えている(pを参照のこと)。

## (2) 第 形態から第 形態への移行の問題点

第 形態から第 形態への移行の論理はもっとも難解な問題だとされてきた。マルクスのように、価値式の両辺を「逆転」させて解く方法は「形態」を生じせしめ誤りであったことはすでに見た。これに対して、宇野は「共通等価物説」によって一般的等価物を導出する方法を対置したといえるが、しかし、それは完成されたものとはいえない。共通等価物説は価値式としても示される必要がある。

共通等価物説を明確化するには「複数の第 形態」(これを第 ' 形態と呼ぶ)の価値式を明示することが適当だと思われるが、そうした試みとして、大内力・戸原四郎・大内秀明『経済学概論』、降旗節雄『マルクス経済学の理論構造』、大内力『大内力経済学体系、経済原論』上、田中史郎『商品貨幣の論理』、山口重克『経済原論講義』などが挙げられる。ここでは山口説を例として考えたい。

山口重克は第 ' 形態を明示し、商品所有者による等価物の追加と排除を通して第 形態を導出する論理を示している。

すなわち、山口は、いずれも「茶」を等価物の一つとしている「リンネル」「上衣」「鉄」「塩」所有者の第 形態と、「茶」を等価物とはしていない「コーヒー」「石炭」所有者の第 形態を示す。そして、後者においては、それまでは等価物としてはいない「茶」を媒介にして交換を実現しようとする例が、また、前者においても、「茶」は直接的有用性と共に「直接的交換可能性という追加的な有用性」(m 23頁)を持つものとして等価形態におかれる例が示される。等価物が追加されたというわけである。

この論理は緻密に構成されており、おおむね異論はない。しかし、第一に、コーヒー所有者が「リンネル需要との関連では、茶に対してコーヒーを 提供できる」(二三頁)という例を挙げている点、つまり、コーヒー所有者が「リンネル」を媒介にして「茶」を求めるといって例を挙げている点には疑問が残る(リンネル所有者が「茶」を媒介にして「コーヒー」を求める例(m 23頁)も同様である)。というのは、山口の掲げる価値式では、リンネル所有者はすでにコーヒーに対して交換の要求をしているのであり、従ってコーヒー所有者はなにも「茶」を媒介にせずともリンネル所有者との交換可能性はきわめて高いからである。こうした例は不必要といえよう。

また、より重要な問題だが、第二に、リンネル所有者が「茶」を媒介物とし迂回して交換を要求する場合に、それまでの相対的価値形態と等価形態の商品量の比率が変化している点である。例えば、山口の例では、「リンネルー〇ヤール 五ポンドの茶 / リンネル 三〇ヤール 二分の一トンの鉄」、「鉄二分の一トン 二〇ポンドの茶」となっており、これを前提として、リンネル所有者は「鉄需要との関連では、二〇ポンドの茶にたいしてリンネルを三〇ヤールまでなら提供できる」(m 23頁)という。この場合、リンネルと茶の商品の比率が、リンネル：茶 = 一〇：五から、リンネル：茶 = 三〇：二〇に異なることになっている(同様なことは他の例でも起きている)。これは、意識的になされたものか否か明らかではないが、もしも、意識的になされたのであれば、その理由が明確にされるべきであろう。

以上は、等価物の追加に係る問題だが、続いて、その排除の論理が示される。

「ここではあらゆる商品所有者が、比較的多数の商品所有者から共通に交換を求められて



いるような商品によって、自分の所有するすべての商品の価値を表現するようになっていく関係をとくにとり出して考察する。」(m 24頁)として、「茶」という一つの商品に対して価値表現している形態、すなわち、第 形態が示される。「リンネルー五〇ヤール 九〇ポンドの茶 / 上衣二〇着 二一〇ポンドの茶 / 鉄一〇トン 四五〇ポンドの茶 / 」(m 25頁)がそれである。

第 形態を積極的に示しそこでの等価物の追加に続いて、このようにその排除の過程を通じて第 形態へ移行せしめる方法は支持し得るが、ここでも疑問が三点ほど生ずる。

その第一は、等価形態の商品名と数量の記述の順序の問題である。宇野によれば、一般的等価物は「もはや単なる商品とはいえないもの」(旧『原論』37頁) その「使用価値は必ずしも直接消費の対象をなすものとしてではない」(新『原論』27頁)ものとされ、山口にあっても、それは「直接の有用性がある程度消極化している」(m 25頁)もの、「交換の媒介物と 直接的な有用物」(m 26頁)の「両方の役割」(m 26頁)を持つものとされている。表現こそ異なるが、両者はほぼ共通の理解といえる。つまり、一般的等価物はいわば商品性と貨幣性の二重性を持っているという認識であろう。宇野においては、すでに見たように、こうした認識を価値式にも反映すべく、第 形態に至ると、等価形態の商品名とその数量の記述順序がそれまでと逆になっていた。この商品名と数量の記述の順序問題は第 形態から周到に考えられていたのであり、第 形態での変更は無視し得ないものである。従って、山口の第 形態での等価形態の商品名と数量の記述の順序は宇野のように改められるべきではなかろうか(やや先回りになるが、この問題は山口の場合、貨幣形態でも生じている。山口の貨幣形態では、その理由は明らかにされていないが、「初版」の「リンネルーヤール 〇・〇五オンスの金」が、「重刷」以降は「一ヤールのリンネル 金〇・〇五オンス」に変更された。商品名と数量の記述順序が左右辺とも逆になったわけである。だが、以上の意味から「リンネルーヤール 金〇・〇五オンス」とすべきではないかと思われる。旧『原論』41頁を参照のこと)。

その第二は、この形態での両辺の商品量の問題である。宇野には、「(第 形態の相対的価値形態にたつ商品量は - 引用者)もちろん一単位じゃない。寧ろ量を多くしている。」(『研究』(1) 263頁)「つまり、それに交換しておけばいつでも他のものと直接に交換できるというわけだ。その点を示すためにぼくは相対的価値形態の商品の量を多くしたわけだ。」(『研究』(1) 264頁)という発言がある。この発言を受けてか否かは不明だが、既述のように、山口の第 形態では、「自分の所有するすべての商品の価値を表現する」場合が取り上げられている。しかし、それが何によって規定されているのかが問われなければならない。一般的等価物とは、先に見たように、いわば商品性と貨幣性の二重性を持つ故、それに対する欲望もある程度の幅のあるものとなる。すなわち、一般的等価物を求めるための、その相対的価値形態の商品の数量は、例えばリンネル所有者の場合には、その上限がその自己所有のリンネルの総量に、下限が第 形態(第 形態)での相対的価値形態のリンネルの数量を合計したものになろう。また、その中間の数量もあり得ると考えられるのである。そうだとすれば、山口の第 形態の相対的価値形態の商品量はここでいうその上限の場合にのみ限定されているが、それでは二重性を持つ一般的等価物をあまりに一面的に把握していると誤解される恐れがある。

第三は、先の点とも関係するが、第 形態(ひいては第 形態)と第 形態との両辺

の商品量の比率の問題である。山口の第 形態（第 形態も）でのリンネルと茶の数量の比率は、リンネル：茶＝一〇：五となっていたが、第 形態ではそれはリンネル：茶＝一五〇：九〇となっている。つまり、第 形態に至ると、茶に対するリンネルの価値が増大されて表現されている。もちろん、これはあくまでもリンネル所有者の主観的な判断ではあるものの、この形態では茶は一般的等価物として多くの商品所有者から求められており、いわばそれだけ価値の上昇する可能性があるのであって、そうならば、茶に対するリンネルの価値はむしろ減少して表現される可能性が高いのではないか。従って、この場合には、茶の数量は、七五ポンドかそれ以下にすべきではないか。

以上のようなことは、いずれも瑣末なことのようにであるが、山口の論理が厳密に構成されているが故に重要な意味をもつと思われる（h 第二篇第三章を参照のこと）。

ともあれ、第 形態から第 形態への移行は商品所有者の交換要求の変更を伴うものである。その意味で、第 形態の第 形態への展開が「拡大」と把握されるのに対して、第 形態から第 形態へは文字どおり「移行」といえよう。その過程をいかに精密に十全に表現するかが問われているのである。

### （3）第 形態の貨幣形態への骨化の問題点

貨幣形態への骨化に際して、宇野においてはそれが二段構えの論理でなされていることをすでに確認した。この方法を積極化したものに日高普『経済原論』がある。

日高は、「貨幣形態」と「貨幣」との区別を強調する。前者を価値形態から理論的に導かれたものとして純粹に設定し、それと歴史的事実である金商品が貨幣になるという後者を区別し、それぞれを価値式としても表現した。日高の「貨幣形態」とは「綿糸一メートル 茶二〇〇グラム / 上衣一着 茶四グラム / 」(i 21頁)であり、「貨幣」とは「綿糸一メートル 金〇・ニグラム / 上衣一着 金四グラム / 」(i 23頁)である。そして、日高はこの貨幣形態での等価物を一般的等価物と規定している。見られるように、両価値式とも相対的価値形態にたつ商品は一単位になっており、等価形態にたつ商品が「茶」か「金」かの違いがある。この点を日高は、「ある特別な地位につくことができればどんな商品でも貨幣になりうる」ということであり、それをかりに茶としたにすぎなかった。しかし事実上は茶ではなしに金が貨幣になった」(i 22頁)ことを示すものと説明している。宇野の二段構えの方法が純化して示されたといつてよいが、疑問も残る。

その第一は、それまでの形態での金商品の扱い方の問題である。日高の価値式においては貨幣形態までは金が明示されていないが、これは、商品としての金が入っているものの敢えて価値式には示さなかったのか、それとも、貨幣形態までは金を除外しておいて等価物を導き、その後に貨幣なるとき除外した金を導入するということなのか。もしも、前者ならば、日高の「貨幣形態」という価値式は存在せず直ちに「貨幣」の価値式に落ちつくのであり、また、後者ならば、きわめて恣意的な想定になりはしないだろうか。

第二は、より重要な問題だが、日高が「どんな商品でも貨幣になりうる」と述べた点である。どんな商品でもよいとされるここでの「茶」にしても実は限定された前提があると思われる。すなわち、日高の貨幣形態においては相対的価値形態にたつ商品はその数量が一単位であったが、そうすると、その対極である一般的等価物は相対的価値形態の商品一

単位より価値が小さく分割される商品でなければならない。例えば、「茶」ならばよいが「家」では困るのである。これだけをとっても「どんな商品でも貨幣になりうる」とはいえないだろう。

宇野においては、旧『原論』から新『原論』、『資本論研究』に至ると、この二段構えの方法が消極化し、第 形態を過渡的形態とする視角が顕在化する。「一般的価値形態は貨幣形態への過渡的形態だから等価物の使用価値が、すでにある程度一般的使用価値に転化してきている」(『研究』(1) 255頁)と。一般的等価物が二重性を持つことはしばしば述べたが、そのことは別言すれば第 形態が過渡的形態だということである。こうした点をふまえると、過渡的形態としての第 形態を通時的、共時的に複数設定し、そうした過程を経ながら貨幣形態への骨化が進展すると考えることができるのでないかと思われる(h 第二篇第四章を参照のこと)。

ところで、すでに見たように、第 形態の第 形態への展開は「拡大」と、第 形態から第 形態へそれは「移行」と表現された。とすれば、一般的等価物の二重性や第 形態の過渡性から鑑みて、第 形態から貨幣形態へは「骨化」と表現するのが適当であろう。

以上、価値形態論の諸問題を検討してきたが、こうした方法とやや異なる枠組みの研究も試みられつつある。だが、全貌は明らかではない(s t uを参照のこと)。

ともあれ、見られるように、近年の研究はきわめて精密化されており、やや複雑すぎる傾向もなくはない。しかし、宇野の提起した画期的な方法を厳密に展開するにはやむを得ないことであり、今日の研究水準はその意味で完成期に達しているといえよう(なお、o q rも参照のこと)。

## 引用文献

- a マルクス 『経済学批判』、岩波文庫版でページ数を示す。
- b 『資本論』(初版)、大月(国民)文庫版でページ数を示す。
- c 『資本論』(現行版)、大月(国民)文庫版でページ数を示す。
- d 宇野弘蔵 『経済原論』(旧版)、『著作集』第一巻、でページ数を示す。
- e 『経済原論』(新版)、岩波全書版でページ数を示す。
- f 『資本論五十年、下』、『五十年』と略記してページ数を示す。
- g 『資本論研究』、『研究』(1)と略記してページ数を示す。
- h 田中史郎 『商品と貨幣の論理』白順社、91年
- i 日高 普 『経済原論』、有斐閣、83年
- j 大内力・戸原四郎・大内秀明 『経済学概論』東京大学出版会、64年
- k 降旗節雄 『マルクス経済学の理論構造』、筑摩書房、76年
- l 大内 力 『大内力経済学体系、経済原論』上、東京大学出版会、81年
- m 山口重克 『経済原論講義』東京大学出版会、86年
- n 奥山忠信 『貨幣理論の形成と展開』社会評論社、90年
- o 馬渡尚憲 「価値形態の基軸」『経済学批判』7、社会評論社、79年
- p 小幡道昭 『価値論の展開』東京大学出版会、88年

- q 永谷 清「価値形態論の威力」『信大経済学論集』信州大、33号、95年
- r 松田正彦「「一般的価値形態」の概念」『年報経済学』広島大、第14号、93年
- s 藤枝 大「価値形態論の新地平」 - (未完)『東経大論叢、東京経済大、院』  
第7 - 14号、86 - 93年
- t 大黒弘慈「貨幣蓄蔵の哲学」『批評空間』 - 5、95年
- u 植村高久『制度と資本』御茶の水書房、97年